



Title: 大瀧詠一は永遠に

前回紹介した中央図書館に住むコピーですが、ちょっと暗めで見づらいということで、このほど照明がつけました。LEDなので、まあ明るいこと。かれらが喜んでいのかどうかは分かりませんが、変わらず元気に泳いでいるのでよしとしましょう。閉館後は忘れず消灯するからね。

それから、利用者の皆様に良いお知らせがあります。中央図書館での複写（コピー）はこれまでモノクロだけでしたが、本日からカラーもできるようになりました。A3サイズまで1枚50円です。モノクロは従来どおり1枚10円です。今頃かと言われそうな気もしますが、どうぞご利用ください。ただし、コピーできるのは図書館所蔵の資料のみ、著作権法で認められた範囲で可能です。

❖松井秀喜は日本の誇りだ

活字に目が疲れたのでユーチューブへ。

学生時代、オーケストラコンサートが溢れる東京に舞い上がって通いつめた東京文化会館では、貧乏学生ながら国内オケだけでなく、ムラヴィンスキー指揮のレニングラード・フィルやバーンスタイン指揮ニューヨーク・フィルハーモニックなども生で聴くことができました。中で最も圧倒されたのはロジェストヴェンスキー指揮モスクワ放送交響楽団。1曲目の「ルスランとリュドミラ序曲」で、とびきり長い指揮棒を頭上でクルクル振り回し、とびきり高速で大音量、しかも一糸乱れぬ演奏を引き出すロジェストヴェンスキー。陽気な魔法使いかと思いましたね。パンダが初めて日本にやってきた頃、70年代の話です。古くてどうもすいません。でも、ロジェヴェンのルスランとリュドミラ、ユーチューブにはないみたい。

それではと、松井秀喜のホームランをユーチューブで見て、いつもながら気持ちが晴れました。私は自分より若い人で松井秀喜ほど尊敬に値する日本人を他に知りません。なんというか、一個の奇跡のような人格だと思えます。あるいは我が身我が心の卑小さを映し出す鏡。

というわけで、思わずアマゾンで伊集院静著『逆風に立つ―松井秀喜の美しい生き方』（角川書店、2013年）を注文してしまいました。ちなみに、大館市立図書館4館に松井秀喜関連本は、児童書を含め13冊あります。

❖大瀧詠一の不思議

古い話になりますが、吉幾三のデビュー曲「俺ら東京さ行くだ」とか阿部敏郎「あせるぜ」のような、コミックソングというか冗談音楽っぽい曲が大好きです。その手のものではなんといっても大瀧詠一のアルバム『レッツ・オンド・アゲイン』（1978年）。私にとって大瀧詠一はまずもって冗談音楽の人でした。あ、それとCM音楽の人ね（三ツ矢サイダーほか）。

大瀧詠一がCBSソニーに移籍してナイアガラ・レーベルを立上げ、第1弾として81年に発売されたのが不朽の名盤『ア・ロング・バケーション』。今現在でも「カナリア諸島にて」とか「スピーチバルーン」とか「君は天然色」とか「さらばシベリア鉄道」とか、早い話全曲がCMや映像のバックに使われることの多い奇跡のアルバ

ムです。岩手県奥州市出身の天才ミュージシャン（奇人成分含有）にして博覧強記のポップス研究家・大滝詠一について紹介し出すときりがないのでこのくらいにしますが、それにしても平成25年、65歳での早すぎる死は実に残念でした。それでも、細野晴臣らとのバンド「はっぴいえんど」でデビューし、最後のシングルが「幸せな結末」というのは見事な締めくくりというしかありません。

こんなことを書いているのは中央図書館の4月の新着図書に、大滝詠一にもかなりの頁を割いている本が入ったからです。大石始（おおいし・はじめ）の『ニッポン大音頭時代』（河出書房新社、2015年）。「どどんがどん」という日本人なら生得的に持っているようなリズムの音楽の、意外な歴史からパロディとしての音頭までその全体像を描こうという本です。ということは戦後のジャズバンドやもちろん大滝詠一も大きくフィーチャされているわけで、いやあ、面白いです。ぜひ。

（陽）